

私の研究の歩みをふりかえって

藤本 文朗*

2007年9月25日受領

I はじめに一その前史を含めて一

私は、この2月27日で73才になる。24才の時、国立大学に務め、定年後福祉系の短大に8年、50年弱大学にのみ就職してきたわけである。

今日、大学の教員に求められるのは、教育、研究、管理運営、地域での活動などと問われるが、私にとっては、はじめから研究者としての活動が中心であった。学会での発表、論文の出筆活動を50年弱つづけてきた。この歩みをふりかえってみることとしたい。

1) 私の研究の枠組みについては、国立大学(滋賀大学教育学部)退官の時出版した「座して障害者と語る一藤本文朗退官記念論集一(退官記念論集編集委員会編、文理閣2000年)の中で「床に臨んで教育を考えると」の論文で述べている。ここでは“教育臨床学”としての方法論をまとめている。

今回は、私自身の人生とかかわって50年弱の研究の歩みの変化について思い出すままたどってみたい。

はじめに私の研究前史ともいべき生育歴についてふれておきたい。

2) 私は、第二次世界大戦前夜の1935年、京都に生まれました。父は龍谷大学の教授(英文学、佛典ほん訳)、母は高校の教師(生物学)で、研究、教育の家といえよう。そして父母とも、お寺(浄土真宗)出身であり佛教徒であった。

小学校1年の時大戦がはじまり、本好きな私は、それに染ってか軍国少年になった。

集団疎開(2年)の後敗戦、そんな戦前戦後の変化の中で教師とか権威とかを信じられなくなり、教師に反抗した。

2月生れとかかわっているか、私は小学校の成績はふるわなかった“オール3”といった所であった。小

学校6年の時、結核にかかり留年したが、その後、不思議と成績はクラスの2、3番になっていった(中学)。

高校時代はよく本を読み、新聞部で活動した。夏休みの宿題が好きでマイマイ貝、蛾の採集に熱中して研究の目ばえみみたいなものが育っていったように思う。

高校の進路選択では、教育学、心理学に関心をもって東京教育大学を選んだが1年目は落ちた。予備校通いの浪人生活では、立派な大学の先生に教えられ有意義な学生生活であった。小学校6年の留年とこの浪人時代は私の発達段階でいえば階段のオドリ場として歯止めになり、次のステップ準備の時間を作ってくれ勉強というものの楽しさを教えてくれた。

大学での専攻は、点数の関係で入りやすい「特殊教育学科」を選んだ。一浪で無事合格した。

II “外国語づけ”の4年間(学部時代1955年～59年)

1) 東京教育大学(現筑波大学)教育学部の特殊教育科学は20名定員でこじんまりしていた教室であった。専門課程の授業も一年からあった。2年生からあるゼミは、英語かドイツ語であり、講義の場合も英文コピーを訳していくといった時代であった。友人で作った自主ゼミも英語、ドイツ語の文献のよみあわせであった。3年生ぐらいから、卒業研究にむけてのゼミがあり、外国文献の報告が学生に課せられた(例えば American J. of mental retarded の最近号の論文)。とにかく学部時代の4年間は外国語づけで、大学とはまず外国語を基礎に学ぶことであった。

2) それと同時に障害児教育は応用科学であるがその基礎となる生理学、心理学も学ばなければならなかった。

その上、中学校(社会科)教員の免許状と養護学校

* 大阪健康福祉短期大学
〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科

の免許状をもとったため、4年間で214単位と忙しい4年間であった。

4年生になって卒業論文にとりかかったが、当時の主流は、心理学の場合、実証主義的な実験が重視された。私は知的障害児のパーソナリティに関心があり、フラストレーションなどの実験をやってみたが、一人ではむつかしく、また知的障害児がフラストレーションになる場面をつくるのが困難などで中止した。

そしてたどりついたのはロールシャッハテストであり、文献研究からはじめ、実験(テスト)をおこない「内外因精神薄弱児の知覚行動の相違—ロールシャッハテストによる」のテーマとして120枚(400字づめ)にまとめた。この卒業論文は「ロールシャッハ研究Ⅱ」1959.で論文として公表することもできた。

3) 学部時代の生活の中で大学以外の活動として、私の研究の基礎を作ってくれたのは大学2年生・3年生時代において杉並区の養護施設に泊まりこみで夜の勉強を指導するかたちでの体験である。この施設にいた子の家族をたずねてみると、いかに東京でも貧しい家があるかがわかった。たたみのない家(土間)をはじめて見た。

当時は、まだ福祉という言葉もなかったし大学の授業でも2単位の講義があったにすぎなかった。しかし私の研究にとって、人間の生活実態も把握する重要性をこの養護施設の体験を通して、深く教えられたといえよう。

4) もう1つ学んだことは、自分が新しい研究テーマにアプローチする時、それに近い研究者をさがし、直接あって教を乞うことである。私の卒業研究の時も指導教官は、この先生の所について学べといった紹介状を書いてくれた。このことは後の研究にも大いに参考になった。

今1つ学んだことは、研究とは“つづけること”だということだ。それは、学部時代ゼミで学生をしばらくあげたA先生は卒業後20年たっても電話で「藤本君、学問はどうなっているんだ。学位はとれるか。」とつめよってくる。その時は「ほっといてくれ」といいたかったが、後で考えると私にとってはうれしい要求であったといえよう。50年弱研究をおくれたのもA先生のおかげといえよう。

Ⅲ 臨床研究の基礎を学ぶ(大学院時代)

私が大学院に行くようになった理由は同級生が「大学院にいこうよ」といってくれたからで、積極的に“研究者”になろうというわけではなかった。

もう少し学問をしたい。語学の勉強を生かしたいという気持であった。

1) 地元の京都に帰って京大大学院(臨床心理学)に合格した。当時は大学院(マスターコース)の受験で2ヶ国語が求められた。研究者になるための最低の資格であったといえよう。

無論、大学院では外国語講読が4、5コマあった。①専門用語の理解 ②国際的視野にたつ ③先行研究を知る などの理由であった。また大学院では、ドクターコースの学生も含めてのほん訳グループもあり、夜おそくまで研究会が毎日もたれた。

大学院時代に最も良かったのは、先生が教育現場にいて、いっしょに協同研究をしたことである(滋賀県の知的障害者の施設、信楽学園など)。

“^{しょう}床に臨んで”研究する「教育臨床」アプローチを学ぶことができた。

後の私の学位論文(博士)「障害児教育の義務制に関する教育臨床的研究」(多賀出版1991年)の基礎になったといえよう。

臨床心理学に関しては、当時、先生には専門家がおらず学生間で学びあった。ロージャスのカウンセリングの技術をテープにおこし分析して学んでいった。教育相談室があり、そこでの事例をカンファレンスで学習していった。

これらの研究を通してマスター論文「非行精神薄弱児の集団心理療法に関する研究」(300枚、1962年、大阪学芸大学紀要に論文としてかいた)を提出することができた。

ここで、先生らが我々に求めたのは臨床心理学を学問にするため、単に事例研究でなく実証的に実験的方法の体系をとることであった。例えば、カウンセリングの実施する前後に心理テストを行ない比較することなどである。

しかし、私にとって、当時主流の操作的な実証主義的な実験心理学がうとましいものとなり“臨床”や教育現場に魅せられていった。

2) マスター時代の2回生の時(1960年)から非常

勤であった、大阪日赤病院の精神神経科外来に行くことになり自閉症のプレーセラピーや頭部外傷のロールシャッハテストをおこない精神科医と接するなかで、臨床のきびしさ、文献研究の必要性を学んだ。

また講義でしか学んだことのない専門用語（Antriebsmangel、情動性欠損）も実際の患者（統合失調症）に接して理解を深めていった。

そしてきびしい臨床精神医とも共同研究することができ、研究が何かを少しづつ深めていった（例えば「頭部外傷の精神医学的研究、共著 1965 精神神経67-5）。

さらに非常勤であるがある大阪の精神病院や国鉄病院に臨床心理士としていろいろの経験をして、後に「岩倉村と障害者」（1987「障害者問題研究」）にまとめることができた。

IV 教育学への接近（大阪学芸大一現大阪教育大一助手時代、1961-65年）

大学院を修了後、すぐ大阪学芸大学の助手になった。またまたその教室が教育学の研究室（教官20名）であり、高濱介二先生に教育学の研究会や現場サークルにひっぱり出されて教育学に接近するようになった。

そんななかで、社会をかえ、人をかえていく上で教育が本流で臨床心理学は対症療法にすぎない様に思えてきた。

そして基本から教育学を研究していく内に社会科学、マルクス、エンゲルスの原典にあたり勉強する様になっていった。

具体的には「学校カウンセリングの批判」（1965 大阪学芸大学紀要）などの研究となっていった。

全体としてこの時期は研究の方向をかえたこともあり、あしぶみの時代といえよう。

また、生活面では、結婚し長男が生まれた時代でもあった。

この時代に研究態度について私として

- 1 古典を読むこと
- 2 欧米の文献にあたる
- 3 研究者集団を組織すること
- 4 たえず現場から学ぶ（床に臨んで）

の4原則を確立していった。

V 教育臨床的研究へ（福井大学時代）—1967～81年—

1965年4月、福井大学学芸学部（当時、現教育学部の養護学校教員養成コースの開設にともない、障害児教育担当の教員として務めることとなり、以後1979年まで15年間福井で研究活動などをおこなった。

1) まず、このコースでは第二外国語をロシア語としたこともあり、ロシア語を学習しつつ唯物弁証法を学びつつ、ソ連の心理学者ヴィゴツキーの欠陥学についての文献研究をおこなった。ロシア語で全部文献が読めたわけでないので英訳本、日本語の文献なども読みあさった。

ヴィゴツキーの「子どもの発達における遊びとその役割」（1933）だけはロシア語の原典に当り、1年がかりで訳した。遊びの弁証法的理解と遊びが人間の発達にとっていかに重要かを学んだ。

また知的障害児は、抽象的思考が弱いが故にこそ生活を通して基礎学力を系統的に教える必要があるとの弁証法的な教育論に感動した。

2) しかし福井時代の中心は、組合活動と地域の平和運動（平和委員会）であった。一時期は授業以外はすべてこの運動ですごしていた。

私は学生時代にはほとんど学生運動に参加しなかったのが社会科学の基礎から組合の学習運動の中で勉強した。哲学からはじめ組合運動論、平和運動へとひろがっていった。また専攻科のゼミではエンゲルスの「イギリスにおける労働者の状態」の古典を英語で読んだのがなつかしい。

これらの運動や学習は直接的には研究活動の成果にむすびつかなかったがその後の研究においてキーワードでいえば、科学論、発達唯物弁証法、平和研究と運動などかかわって土台をつくってくれたといえよう。

3) 福井時代においての世に評価されるべき研究成果は、1979年以前、即ち養護学校義務制以前の在宅不就学障害児の実態調査（鯖江市を中心に）研究である。1969年、日本教育学会誌「教育学研究」36-1に論文として発表している。それを発展させ「不就学障害児の死亡例の実態調査研究」（「教育学研究」41-1、1974）として論文発表して多くの人々の注目をえたのと、その後の研究で引用されたのもうれしかった。この研究は5年間余りかけて地域の在宅不就学障害児の

家をたずねての足でかせいだ研究でまさに“床に臨んで”の研究といえよう。

私の学位論文（博士教育学、東北大学、1993）の核となったのは上記の福井時代の研究である。

4) 最後に、福井時代の研究で、研究そのものでないが、福井の地から全国によびかけて（発起人）全国障害者問題研究会（全障研）—1968年—結成のため力をそそいだことである。日本ではじめての自主的、民主的研究団体（会員は現在約5,000名）で40年の歴史を今むかえようとしている。その後、副委員長、「障害者問題研究」の編集長をえて、今は顧問である。

VI 国際的視野で（滋賀大学時代、1979-2000年）

父の介護のことがあり、福井大学から滋賀大学に変わり京都の地での研究活動を21年間送ることとなる（自宅は京都市東山区、私自身の出生地でもある）。

1) 1979年度より、養護学校の義務制が実施されて、障害の重い子もふくめてすべての障害児が学校に入学してきた。そこで求められた1つの課題は、私自身が早くから取りくんでいた自閉性障害児の学校教育の実践である。

発達保障論の立場より、ひとり一人の自閉性障害児を発達診断し、その発達の共通の道すじと、自閉性障害の障害を軽減する教育実践を現場の先生とともに考えていった。そのため京都の教職員組合とともに「科学的障害児教育会（科障研と略す）を結成し、代表の1人となった。そしてこれらの共同研究成果は年2回発行される「障害者教育科学」（かもがわ出版）に発表されていった。

2) この研究会では、関西で特に強かった「障害児教育解体論、養護学校不要論」へのイデオロギー批判が求められた。この問題、同和問題とも関係しての政治問題ともなっていた（革新府政への解体、京都大阪での）。障害児教育においては養護学校を作ることが差別であるということで建築反対運動がくりひろげられていった。これらのイデオロギー闘争のための論文は上記の「障害者教育科学」で諸流批判としてのせられた。著者としては、藤本文朗他編「障害児教育をどうすすめるか—論争点と解明と批判—」（青木書店 1986年）を発刊していった。私はこの研究（イデオロギー批判）を通じてはじめて理論的研究の必要性を感じ、古典の研究への常々の学びをおこなっていた。

った。

3) 1980年12月末、私は日本ベトナム障害児教育調査団の団長としてベトナムを訪問した（1週間）。訪問した理由は①世界一の軍事国アメリカを打ち負かしたベトナムのたましいをみたい ②国際障害者年がはじまった年でもあり国際的視野にたつて障害児教育を考えたい ③同じアジアの発展途上国で社会主義をめざす国をみることは100年先の障害者問題をみとおせることになる（世界レベルで）。

その後、1985年2ヶ月ベトナムに文部省（当時）の在外研究として留学することになる。

そしてアメリカがベトナムでまいた枯葉剤（ダイオキシンを含む）作戦によって生じたと考えられる結合双生児ベトちゃんドクちゃんとの出会い、その年の10月に「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」を形成し、今日まで22年間、二人の発達保障にかかわってきた。この事例研究は人類が作った偶然の中に必然をみようと研究のころみであるといえよう。その後ベトナムの現地調査でダイオキシン被害二世の実態調査を医師などの協力をしながらおこなってきた。疫学的調査の段階でその因果関係を明らかにするまでに至っていない。

その後「ベトちゃんドクちゃんだけでなく」ということで、日本ベトナムの障害児教育の交流を行こなう（毎夏、今年まで16回）。さらにベトナムの最初の障害児教育教員養成をホーチミン市幼児師範学校で創立し、日本の講師40人がボランティアで参加した。

VII 認知症の問題に接して

滋賀大学を定年退職し、介護福祉士を養成する短大で「老人・障害者の心理」の講義などを担当するなかで、今までの障害児教育では全く知らなかった認知症の問題にかかわるようになった（6年間）。と同時に私自身が64才の時脳こう塞になった（軽度、手足の軽いしびれが残る）り、うつ症になったりしたことも認知症（高齢の障害）への関心は深まっていた。

しかし研究は半ばであり研究を深める所にはいていない。

私も73才で死にむかって発達することが求められる毎日である。

「日残りテ昏ルルニ未ダ遠シ」（藤沢周平）の感がある。

Ⅷ 今後の課題—おわりに—

私の研究は臨床的研究で、あっちをかじりこっちをかじるといったもので体系的な研究とはいえない。本流は障害児教育といえよう。認知症の研究、欠陥学（ロシア）の研究も中途である。ベトナムの障害者問題もしかりである。

そんな中で、また頭の中に出てきたテーマは、「北朝鮮の障害者」のことである。いくつかの資料から①都市には障害者を出さない ②施設にとじこめている

③積極的な障害者対応はない といえよう。いつの日か、韓国について脱北者から聞きとりをしたいと思っている。世界で最も矛盾をかかえているのは北朝鮮の障害者ではなからうか。

(以上)

(ふじもと ぶんろう 本学教授)